2024年9月23日（月）飯能キリスト聖園教会・ますらお会・研修1

教会史の中の終末論

若井　和生

聖書の教えの中で、歴史の完了、神のこの世での働きの完成に関する分野を終末論と呼びます。私たちの目指すべきゴールである終末論の学びは、私たちにとってとても大事な学びです。しかし同時にとても扱いづらい分野でもあります。なぜならこの終末に関して様々な聖書の解釈が乱立し、しばしば熱狂的、感情的議論を引き起こし、教会内に多くの対立や分断を引き起こしてきた歴史があるからです。

終末の様相を色濃く表す今日において、この終末論の学びは欠かせません。そのために私たちは早急に結論を出さず、祈りつつ冷静にみことばに向き合い、みことばから教えられ続ける必要があります。この発題においては教会史を概観し、終末に対する諸々の解釈がなぜ作り出されてきたのかについて考えます。

1．古代

（1）迫害の中の信仰

・初代教会は主イエス・キリストの再臨に対する明確な信仰をもっていた。迫害などの苦しみの中にあって「主イエスよ、来てください（黙示録22：20）」との祈りは、初期キリスト者たちを深いところで支え続けた祈りだった。

・2世紀の教父・エイレナイオスは創造から新天新地の完成まで救いの全体像を提示したが、世のはじめの六日間の創造と七日目の安息とが全歴史の原型であると考えた。一日を千年として創造の六日間を六千年とし、七日目に千年王国が到来し救いの完成に至る、とする独特の歴史観を提示している。

（2）ローマ帝国公認後の展開

・ローマ帝国の皇帝コンスタンチヌスが313年にミラノ勅令によってキリスト教を公認。キリスト教会に対する迫害はこれで終わったが、国家との癒着により教会は霊的腐敗と堕落を経験することになる。

・キリスト教が国家に公認されたことにより教会内に再臨を待望する意識が薄らぎ、それ以上に教会を通して今実現している神の国が強調されるようになった。

（3）アウグスチヌス

・古代教会の偉大な指導者であったアウグスチヌスは著作『神の国』の中で、千年期は未来にあるのではなく、キリストの到来とともにすでに始まっていると主張

した。黙示録の記述を、地上の教会の歴史を比喩的に述べたものと理解した。

2．中世

・カトリック教会は世俗権力の後ろ盾を得ることによって組織的にも確立され、キリストの再臨を待望する思想を必要としなくなった。千年王国論は正統的教義からは排除されることとなった。

・中世の封建社会が崩れ始めた11世紀以後、ヨーロッパの根無し草的貧民の間に、千年王国信仰が拡大する。千年王国信仰は、預言者やメシヤを自称する人物や宗教的セクトを媒介として、現世で楽園を求める民衆のエネルギーや想像力と結び付くことが多かった。

・天変地異が生じたり、疫病や飢餓に見舞われる危機の時代に千年王国論は農民一揆や宗教運動に伴って現れたが、狂信的な信仰運動と見なされ弾圧されることが多かった。

3．16世紀　宗教改革期

（1）宗教改革者ルター、カルヴァン
・カトリック教会との対決においては聖書論、救済論、教会論が中心。

・ルターもカルヴァンも救いの終末における完成を信じていたが、いつそのような時が来るのかについての関心はなかった。再洗礼派などの急進派が千年王国論を唱えるのに批判的だった。

（2）再洗礼派
・1535年にドイツのミュンスターで、急進的な再洗礼派の人々がキリストの再臨と千年王国を待望してミュンスターに立て籠るミュンスター事件が起こる。カトリックとプロテスタントの両陣営から迫害され滅ぼされた。

・再洗礼派の中には急進的、暴力的になる者もあったが、その反面で神の国を実現するために暴力を行使することに批判的な「静かな終末論」の立場を取る者も多かった。

・正統的な教義から排除された千年王国論が、民衆や“異端的”預言者によって受容

される構図は宗教改革期に至っても変わっていない。

4．17世紀　ピューリタン（清教徒）革命時（1642年）

・イギリスに誕生したピューリタンと呼ばれるクリスチャンたちが、千年王国論を積極的に支持。千年王国論はピューリタン革命を支える精神的土台となった。ピューリタン革命の成功によってイギリスにて王政が廃止され、ピューリタンの精神にもとづく国造りが一時的にはなされたが、その後反動の時代を迎える。

・歴史的背景：

① ヘブライ学の成長により終末論に対する関心が高まった。
② 黙示録の研究が盛んになる。黙示録の象徴を歴史の重大事件と結び付ける解釈が流行した。（例：黙示録17章「7つの鉢に盛られた神の怒り」がカトリックとトルコに下される）

・王政復古によって、ピューリタンたちは逆に迫害されることとなり、その多くがアメリカに渡った。キリスト王国建設の夢は新大陸に持ち込まれることに。アメリカ建国の理念の中で生かされることになる。

5．アメリカでの発展

（1）アメリカにもたらされた千年王国説の類型

・前千年王国説（千年期前再臨説）：
キリストが再臨されたのちに、再臨のキリストと復活したキリスト者たちが千年間王国を治めると主張。キリストの力のみによっての建設であり、人間の力は神の国建設に貢献できない。この世との関わりにおいて厭世的。

・後千年王国説（千年期後再臨説）：
再臨が千年王国完成後に来るとする。千年王国は教会とその信徒たちによって打ち立てられる。千年王国という社会が建設されていく過程を信者は目撃できるし、建設に参与できる。この世との関わりにおいて楽観主義的。

・17～18世紀の建国時代は「前千年王国説」が優勢で、合衆国建国以後は「後千年王国説」が優勢となる。1861年の南北戦争以後の社会問題の顕在化、自由主義神学の流入によるキリスト教会の混乱を経て再び「前千年王国説」が優勢になる。

（2）ディスペンセーション主義の誕生と展開

・1825 年にイギリスでブレザレン運動を起こしたジョン・ダービーは、ディスペンセーション主義（天啓的歴史観）と呼ばれる聖書解釈を提示。ダービーは 1862～1877 年にかけてアメリカを 7 回旅行し、アメリカでディスペンセーション主義を受け入れる人々が増えていった。

＊ディスペンセーション主義とは：

・人類の歴史を 7 つのディスペンセーション（天の啓示による時代）に分けて理解する聖書解釈。　「1　無垢の時代（エデンの園)」「2　良心の時代（アダム～ノア)」「3　人間による統治の時代（ノア～アブラハム)」「4　約束の時代（アブラハム～モーセ)」「5　律法の時代（モーセ～キリスト)」「6　恵みの時代（使徒の働き～最後の審判)」「7　御国の時代（キリストの再臨～千年王国)」。

・前千年王国説を取る。この世への厭世観と切迫感が特徴。19 世紀の大伝道者ムーディが取り上げ、アメリカ中に広がった。さらに 1909 年に発行された「スコフィールド引照付聖書」が全米でベストセラーとなり、ディスペンセーション主義を普及させるために大きく用いられた。その後、根本主義（Fundamentalism）や福音主義（Evangelism）の発展に伴いアメリカの福音的な教会に広く浸透し、今日に至る。アメリカからやって来た宣教師たちによって日本にももたらされた。

＊ディスペンセーション主義の問題：

・「イスラエル」ということばを教会ではなく、国家ないし民族としてのイスラエルを指すと解釈。神はイスラエルに対する特別な扱いを中断しておられるので、必ず未来のある時点で国家としてのイスラエルを回復すると信じる。20 世紀のイスラエル再建の歴史に併せてシオニズム運動の活性化をうながした。

・旧約のイスラエルへの祝福の約束が、イスラエルの不信仰により霊のイスラエルであるクリスチャン（教会）に置き換えられたという聖書理解を厳しく批判する。

・ディスペンセーション主義の影響を受けた福音派の人々が、歴代の共和党政権を支持し、親イスラエル主義に強い影響を及ぼすことにつながった。

祈り：様々な考えに分かれ分断・対立することの多い終末の理解において、私たちが冷静にみことばと向き合い、聖書から謙遜に教えられ続けることができますように。初代教会のキリスト者たちが持っていた再臨に対する希望を取り戻すことができますように。